



Title	若い世代の方言の語彙とアクセント : 香川方言話者の調査から
Author(s)	轟木, 靖子
Citation	問谷論集. 2024, 18, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95436
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

若い世代の方言の語彙とアクセント

——香川方言話者の調査から——

轟木 靖子

〈キーワード〉 方言 語彙 アクセント 若年層

1. はじめに

本研究は、香川県で成育した20代の話者におこなった調査から、伝統的な方言の語彙やアクセントの保持が両親の出身地や本人の居住歴、および方言に対する意識とどのような関連性がみられるかについて分析・考察をおこなうものである。

一般的に、若い世代は方言の使用が少なく、共通語化が進んでいると考えられている。ただ、地域において廃れてしまう語法やアクセントがある一方で、若い世代にも使用される語彙や表現方法もあり、それは語形やアクセントが共通語とは異なっていることがある。また、アクセントについても、単語アクセントの録音調査において、「～が見える」の「が」を省略した「～見える」にすると、「～が見える」とで異なる結果となることがある(轟木・山下(2023))。古い方言語彙を使わない＝共通語とはならず、伝統的な方言形ではないが、共通語の語形とも異なるものは、新方言として知られている。

また、若い世代といっても、方言の伝統的な語彙やアクセントを日常的に比較的多くつかう話者と少ない話者がいる。三世代同居ならそうなりやすいのでは、というようなイメージはわかりやすいが、実際にどうなのかは不明な点が多い。

本研究では、香川県の方言について、比較的上の世代がよく使っていると考えられる25の語彙の使用状況と、2拍名詞のアクセントについて香川県で成育し

た8名の学生に調査をおこない、その際に回答してもらった本人の居住歴や方言に対する意識、また両親の出身地と、回答者本人がどの程度香川県の伝統的な方言の語彙やアクセントを保持しているかについての関連性について分析・考察をおこなう。

2. 香川県の方言について

2-1. 香川県の地理的な特徴

四国は徳島、香川、愛媛、高知の四県から成るが、四国の中央に四国山地があるため、古来は高知県と他の3県との往来は難しかった。言葉の面でも徳島、香川、愛媛の3県と高知では様相が異なっており、土居(1982)によれば、四国方言は阿讃予方言(徳島・香川・愛媛)と土佐方言(高知)に分けられる。

香川県は全国で最も面積が小さい県であり、そのためか、語彙については県内で差があるのはごく一部に限られるようである。いっぽうで、アクセントについては、「最古の一次アクセントとそれに次ぐ二次アクセントが揃って存在する」(中井(2003):102)という、多彩で複雑な様相を呈している。香川県内の方言については、東讃と西讃に分けられることが多いが、これは古くは東の高松藩と西の丸亀藩に分かれていたことに由来している^(注1)。

2-2. 香川県のアクセント

香川県のアクセントは京阪式アクセントに属する。高起式(下降式)と低起式(上昇式)の区別があり、2拍名詞のアクセントが4種類に分かれる二次アクセントであるが、京阪式とは以下の点が異なる。

- (1) 第1類と第3類が同じH0型であること
- (2) 第4類のL0型の最終拍あるいは助詞をつけたときの助詞の部分の顕著な音声的上昇がないので、非ネイティブには第1類、第3類との区別がつきにくい。

第2類については、玉井(1965)によると、H1型が中心の地域と、高松など

第2音節が広い母音の場合にL2F（Fは拍内で高から低へ下降することを示す）型になる地域があり、その場合、第5類との混同が起り、ほぼ同じように発音されるといえることである。また、中井(1997)では、高松のアクセントでは、2拍2類は第2母音の狭広により、壮年層はH1型とL2F型に分かれているが、若年層はH1型、語音によってはH0型が優勢であること、また第4類は壮年層はほぼL0型であるのに対し、若年層にはH1型が出現していることが述べられている。

3. 香川県の方言語彙およびアクセントに関する調査

3-1. 調査の概要

香川県内で成育した若い世代がどの程度香川方言の伝統的な語彙を使用し、またアクセントを保持しているかを調べるため、香川大学の学生8名（男性4人、女性4人）に調査をおこなった^(注2)。香川方言の語彙については、飯田(2017)、岸江・坂東・村田・鈴木編(2009)、香川県話し言葉研究会編(2010)を参考にして伝統的な語彙を中心に大学生に予備調査をおこない、比較的今でも使われていると考えられる語彙・表現を中心に25項目を選び、質問紙による調査を対面でおこなった。アクセントについては、2拍名詞第一類から第五類まで18の語について読み上げ式の録音調査をおこなった。アクセント型の判断は調査者（言語形成地：東京都世田谷区）が聞き取って判定し、H0とL0の区別が微妙と思われるものについては回答者に尋ねて確認した（例：「鼻」と「端」は同じか違うか、等）。回答者の属性については、生年、居住歴、通っていた小・中学校、両親の出身地、香川県の方言についての意識を尋ねる質問に回答してもらった。

アンケートの回答については、研究の目的のみの利用であり、資料として提示する場合は本人が特定されないよう留意して使用することを伝え承諾を得た。調査時間は30分程度であった。

3-2. 調査の内容

3-2-1. 香川県の方言についての意識

回答者の香川県の方言に対する意識については、以下のような質問に回答して

ほんに、おもっしょい、なんしょん、いっきょん、なんぼ、こそばい、まけた、よっけ・ようけ、おる)を、その後で②の語彙(むつごい、たいぎ、がいな・がいに、～げな、どくれる、はがい、はじかい、なんちゃんない、けっこい、じょんならん)を、そして③予備調査の途中で比較的使用されている語彙・表現として出て来たもの(～やけん・～やきん、むゆか、たちまち、はめる、立てって)の順番で質問紙を作成した。

3-2-3. アクセント調査項目

アクセント調査については、以下の2拍名詞について、「(名詞)が(形容詞/動詞)」のような短文と名詞単独で2回ずつ読んでもらった。録音にはハンドマイクとICレコーダを使い、大学内の静寂な教室でおこなった。

第一類 鼻、端、飴

第二類 岩、紙、寺、冬、橋

第三類 犬、髪、雲、花

第四類 松、箸、空、海

第五類 雨、猿

3-3. 調査対象者および調査時期

調査対象者は香川県で成育した香川大学の3年生または4年生で、年齢は調査時20歳から22歳までの男女8名である。以下に回答者の成育地、両親の出身地、調査日を示す。3名は2022年、5名は2023年に調査を実施している。()内の数字は居住年齢をあらわす。県名がない市町は香川県である。回答者の番号のMは男性、Fは女性をあらわす。

M01 (東かがわ市、両親も同じ)	2023年7月4日
M02 (0-3 愛媛県、3-15 三木町、両親は愛媛県)	2023年7月6日
M03 (丸亀市、父丸亀市、母高松市)	2022年10月12日
M04 (高松市、父高松市、母丸亀市)	2022年10月12日
F01 (綾川町、両親も同じ)	2023年6月29日
F02 (高松市、両親も同じ)	2023年7月3日
F03 (0-1 徳島市、1-18 高松市、両親は徳島県)	2023年6月29日
F04 (丸亀市、父宇多津町、母丸亀市)	2022年10月11日

4. 調査結果

調査結果を表1から表3に示す。表3のHは高起式、Lは低起式、Oは無核をあらわす。1または2の数字はアクセント核の位置（語頭からの拍数）を、Fは拍内下降をあらわす。

方言に対する意識については、全体に回答がばらけたが、「香川の方言が好き」で「出身校の先生と方言で話」し、「同年代の人に比べて自分は方言をよく使う

表1 方言に対する意識

回答者 \ 項目	香川の方言が	出身校の先生と	方言で話すことが多い
F01	好き	基本は共通語	はい
F02	好き	基本は共通語	わからない
F03	どちらでもない	基本は共通語	わからない
F04	どちらでもない	かなり方言を使う	はい
M01	どちらでもない	基本は共通語	わからない
M02	好き	かなり方言を使う	いいえ
M03	どちらでもない	かなり方言を使う	はい
M04	好き	基本は共通語	わからない

ほう」だと考えている回答者はいなかった。「香川の方言が好き」は4名いたが、「出身校の先生と話すときには「方言をかなり使う」と「基本的に共通語で話そうとする」が2名ずつとなった。この「基本的に共通語で話そうとする」2名は、自分が同年代の人と比べて、方言で話すことが多い方かについては「わからない」と回答している。

方言語彙の使用については、「えらい」「ほんま、ほんに」「なんしょん」「いっきょん」「こそばい」「まけた」「おる」「…やけん、…やきん」については、全員が「日常的に（そのような状況になれば自分が）使う」と答えていた。ただし、「ほんま、ほんに」は「ほんま」のみ、「…やけん、…やきん」については「…やけん」のみと回答した者もいた。

「(自分が) 使う」という回答が少なかったものは、「…げな」「はじかい」「むゆか」「たちまち」「はめる」でいずれも2名、「どくれる」は3名であった。「はがい」「けっこい」「じょんならん」は使用者がおらず、なかでも「けっこい」「じょんならん」は「聞いたことがない」が半数以上となった。

アクセントについては、香川県のアクセントの特徴の一つである、第一類の「鼻」と第三類の「花」を同じH0型で発音したのは二人で、この二人は方言語彙の調査でも、「自分で使う」回答者が2名のみであった五つの語彙のうち三つを使用すると回答していた。第三類の名詞は、共通語と同じL2型が多く見られるが、「犬」はH0型が多かった。第五類については、1名のみ「雨」を低高+拍内下降のL2F型で発音していた以外はすべて共通語と同じH1型であった。

表2 語彙調査の結果
 (○：自分が使う △：他の人が使う ×：聞いたことがない)

語	回答者	F01	F02	F03	F04	M01	M02	M03	M04
えらい		○	○	○	○	○	○	○	○
ほんま・ほんに		○	○	○	○	○	○	○	○
おもっしよい		○	△	△	○	△	○	○	○
なんしよん		○	○	○	○	○	○	○	○
いつきよん		○	○	○	○	○	△	○	○
なんぼ		○	△	○	○	○	○	○	○
こそばい		○	○	○	○	○	○	○	○
まけた		○	○	○	○	○	○	○	○
よつげ・ようげ		○	△	△	○	○	△	○	○
おる		○	○	○	○	○	○	○	○
むつこい		○	○	△	○	○	○	○	○
たいぎ		△	△	×	△	△	△	△	△
がいな・がいに		○	△	×	△	△	△	△	△
ーげな		○	×	△	○	△	△	△	△
どくれる		△	×	×	○	○	△	○	△
はがい		△	△	×	△	△	△	△	△
はじかい		△	×	×	△	△	×	○	○
なんぢやない		○	△	△	○	○	△	○	○
けつこい		△	×	×	△	×	×	×	×
じよんならん		×	×	×	△	△	×	×	△
ーやけん・やきん		○	○	○	○	○	○	○	○
むゆか		○	×	×	△	○	△	×	△
たちまち		○	△	△	△	○	△	○	△
はめる		○	×	×	△	○	×	×	×
立てつて		○	○	○	△	○	○	○	○

表3 アクセント調査結果 (1)

回答者 類・語	第一類			第二類		
	鼻	端	飴	岩	紙	寺
F01	H0	H0	H0	H0	H0	H0
F02	H0	L2	H0	H0	L2	L2
F03	H0	H0	H0	H1	H1	H0
F04	L2	H0	H0	L2	L2	L2
M01	H0	L0	H0	L2	H1	H0
M02	L2	H0	H0	H0	L2	L2
M03	H0	H0	H0	H0, L2	L2	L2
M04	H0	H0	H0	H0	L2	L2

表3 アクセント調査結果 (2)

回答者 類・語	第二類		第三類			
	冬	橋	犬	髪	雲	花
F01	H0,L2	H1	H0	H0	H1	H0
F02	H1,L2	L2	H0	H0	H1	L2
F03	H1	H1	H1	H1	H1	H1
F04	L2	H0	H0	L2	H1	L2
M01	H1,L2	H1	H0	H0	H1	H0
M02	L2	L2	H0	L2	H1	L2
M03	L2	L2	L2	L2	H1	L2
M04	H0	L2	L2	L2	H1	H1,L2

表3 アクセント調査結果 (3)

回答者 類・語	第四類				第五類	
	松	箸	空	海	雨	猿
F01	H1	H0	H1	H1	H1	H1
F02	H1	L2	H1	H1	H1	H1
F03	L0	H1	H1	H1	L2F	H1
F04	H1	L2	H1	H1	H1	H1
M01	H1	H0	H1	H1	H1	H1
M02	H1	H1	H1	H1	H1	H1
M03	H1	L2	H1	H1	H1	H1
M04	H1	H1	H1	H1	H1	H1

5. 考察

5-1. 伝統的な語彙やアクセントの保持について

今回の調査では、とくに F01 と M01 に、語彙・アクセントの両方においてほかの話者よりも伝統的なものを残している傾向がみられた。前章で述べたように、自分が使用するという回答が2名だったものは「…げな」「はじかい」「むゆか」「たちまち」「はめる」であったが、F01 と M01 はこのうち「むゆか」「たちまち」「はめる」を「自分で使う」と答えており、さらに F01 は「…げな」、M01 は全体の使用者が3名であった「どくれる」も使うと答えている。この2名ほどではないが、F04 はやはり使用者の少なかった「…げな」「どくれる」も使用すると答えていた。

F01 と M01 は、アクセントにおいても、第一類の「鼻」と第三類の「花」を同じ H0 型で発音しており、ほかの回答者よりも香川県の方言を比較的保持していると考えられる。この2名の方言に対する意識は、「出身校の先生と話すときは、基本的には共通語で話そうと思う」が共通していたものの、香川の方言は「好き」(F01)「どちらでもない」(M01)、「同年代の人と比べて方言で話すことが多いか」については「はい」(F01)、「わからない」(M01) というように、

それほどはっきりした傾向は見られなかった。

ただ、F01とM01は両親も本人も同じ市町で生まれ育っている点が共通している。その点では、F02も同様であるが、F02には、そのような傾向はみられなかった。これは、F01が綾川町、M01が東かがわ市、F02が高松市であり、人の出入りの多い中心地の高松市と郊外での差があると推測される。綾川町と東かがわ市は地理的には離れており、特定の地域の傾向とは言えなさそうである。

「同年代の人と比べて自分は方言で話すことが多い」と回答したほかの回答者(M03、F04)について見てみると、M03は「おもっしょい」(全体では使用者が8名中4名、以下(4名)と示す)、「はじかい」(2名)、「どくれる」(3名)、「たちまち」(3名)を、F04は「…げな」(2名)、「どくれる」(3名)を自分で使うと答えていた。ただ、この2名とも先のF01やM01に比べるとアクセントの面でも伝統的なパターンを残していると言い難い。

香川県の方言が「好き」と答えたのはF01、F02、M02、M04で、このうちM02のみが「出身校の先生と話すときに方言をかなり使うと思う」と回答している。しかし、自分が同年代の人と比べて方言で話すことが多いかどうかについては「わからない」としている。M02はこれまで見たほかの回答者に比べると「自分で使う」語彙は使用者が多いものに偏っており、「出身校(中学校)の先生」のイメージに方言の使用が結びついていることも考えられる。

5-2. 2拍名詞のアクセントについて

5-2-1. 第一類と第三類のアクセント

香川県の伝統的なアクセントでは、第一類と第三類がどちらもH0型で発音され、中井(1997)の調査時点でも、若年層は第一類と第三類はH0型が優勢であった。今回L2型の発音も多くみられるが、これは共通語の影響と思われる。これは「雲」が全員H1型であった点にもみられる。F04とM04は第一類の「鼻」と第三類の「花」をどちらもL2型で発音しており、これは偶発的なことなのか、あるいはなにか要因があるのかは再度検討する必要がある。

F03は第三類の「犬」「髪」「花」をH1型で発音しているが、この話者は第四類の「松」をL0型で発音しており、両親の出身地(徳島県)のことばの影響も

ありそうである。

5-2-2. 第二類のアクセント

第二類のアクセントについては、中井（1997）ですでに壮年層で優勢な H1 型と L2F 型が若年層で H0 型と H1 型に変化していることが指摘されている。玉井（1965）によると、観音寺市、丸亀を中心とする地方では H1 型だが、高松を中心とする地方では第二音節が広い母音の語は L2F 型で発音され、第二音節が狭い母音の語は丸亀などと同じく H1 型であると述べられている（p.50^{注3}）。今回の調査語彙では、第二母音が広い語は「岩」「寺」狭い語は「紙」「冬」「橋」となるが、「岩」では5名、「寺」では3名に H0 型がみられた。「紙」「冬」「橋」を H0 型で発音していたのが1名ないし2名に限られているのとくらべると、若干差がみられる。M01 と F03 は第二類の発音に H1 が多めである。M01 は両親も本人も東かがわ市、F03 は本人は1歳から高松市であるが、両親が二人とも徳島県徳島市であり、地域的な影響も少なからずあるのかもしれない。

第二類の H0 型のアクセントは、伝統的なアクセントとも、共通語のアクセントとも異なる。話者が共通語あるいは方言どちらのアクセントだと捉えているかを確認しなければならないが、今後も共通語化せずに受け継がれるのであれば、新方言の一つとしてとらえることも可能かもしれない^(注4)。

5-2-3. 第四類と第五類のアクセント

第四類と第五類のアクセントについては、ほとんどの話者に H1 が多くみられた。これも中井（1997）で報告されている H1 型への変化がさらに進んでいることを確認する結果となった。「松」を L0 型で、「雨」を L2F 型で発音している F03 は、「見える」を（京都のような）L0 型で発音しており、他の話者の「見える」（L2 型）とは異なっていたことから、なんらかの理由で京阪式のアクセントを保持していると考えられる。

6. まとめ及び今後の課題

香川県の20代の話者の伝統的な方言の語彙やアクセントを保持しているかについて、香川で成育した男女8名の大学生の調査から考察をおこなった。古い方言語彙やアクセントで廃れていくものがあるいっぽうで、両親の出身地と同じ地域で成育した回答者は比較的他の話者よりも伝統的な語彙やアクセントを保持する傾向がうかがえた。これに比べると、「香川の方言が好き」「自分は同年代の人に比べて方言を使うほうだ」という意識は本人が伝統的な語形やアクセントを残しているかへの影響はそれほど大きくないように見受けられた。若い人すなわち共通語ということではなく、個人差はあっても方言の語彙やアクセントの一部は今後も残っていくと考えられる。今回は調査の量も人数も十分とはいえ、今後さらに調査を継続して分析・考察をおこないたい。

また、名詞のアクセントについては、助詞がついた「…が」「…を」の発音を確認しないと型を特定できないが、助詞をつけることにより、共通語的なアクセントを引き出してしまう傾向もあるようであり（轟木・山下（2023））、録音調査で自然な発話を引き出す工夫を検討する必要がある。より良い調査方法の検討も今後の課題としたい。

注

- 注1 西讃の一部を中讃として区別することがある（吉田（1999）：56）
- 注2 回答者のうち男性2名、女性1名は前の年に調査を実施しているが、その結果の一部については轟木・山下（2023）で報告している。
- 注3 アクセントの記号（○の上に斜めに下がる棒線等）の再現が難しいため、著者がH1型、L2F型という語に置き換えている。
- 注4 吉田（1999）でも、西讃地域において2拍名詞第二類の「寺」「岩」「旅」に若い世代でH0型が多いことを指摘している（p47）。

参考文献

- 飯田奈津美 (2017) 『香川県の方言の地域差と世代差について－「なんしょん (な)」「ご飯食べたん (な)」を中心に－』香川大学教育学部平成 28 年度卒業研究
- 井上史雄 (1985) 『新しい日本語－＜新方言＞の分布と変化』明治書院
- 香川県話し言葉研究会編 (2010) 『香川県東部方言の語彙に関する総合的研究』平成 21 年度財団法人福武学術文化振興財団瀬戸内海文化研究・活動支援助成 A. 調査・研究による研究成果報告書
- 岸江信介・坂東正康・村田真美・鈴木寛子編 (2009) 『徳島・香川両県西部のことば』徳島大学国語学研究室
- 木野田れい子 (1982) 「12 香川県の方言」『講座方言学 8 中国四国地方の方言』国書刊行会 pp.367-393
- 玉井節子 (1965) 「香川県のアクセント」『国語研究』第二十号 pp.41-57
- 轟木靖子・山下直子 (2023) 「伝統的なアクセントと共通語のアクセント：香川方言話者の例」第 43 回日本語日本文化教育研究会 (2023.3.11)
- 土居重俊 (1982) 「9 四国方言の概説」『講座方言学 8 中国四国地方の方言』国書刊行会 pp.269-294
- 中井幸比古 (1997) 「高松方言におけるアクセントと語音の関係について (2)」『神戸外大論叢』48 巻 2 号 pp.41-59
- 中井幸比古 (2003) 「香川県」(小辞典 ふるさとのことば)『言語』vol.32-1 大修館書店 pp.102-103
- 吉田光津子 (1999) 『香川県西部のアクセントについて』香川大学教育学部平成 10 年度卒業研究

謝 辞

調査に御協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。また、査読者の方には諸々のご指摘・アドバイスをいただきました。心より御礼申し上げます。

付 記

本研究は R3-R6 年度基盤研究 (C)「方言調査における調査協力者選定のための新しい手法に関する研究」(課題番号 21K00547 研究代表者 轟木靖子) による研究成果の一部です。

トドロキ ヤスコ (香川大学)

On Traditional Vocabulary and Accents of the Kagawa Dialect **-Results from a Survey of Young Kagawa Dialect Speakers-**

TODOROKI Yasuko

A survey was conducted on the use of traditional vocabulary and accents in the Kagawa dialect among university students who grew up in Kagawa. The extent to which respondents in their twenties retained traditional dialect vocabulary and accent was analyzed and discussed. The survey also asked respondents to answer questions about their parents' hometowns and their awareness of dialects.

It is said that young people tend to use standard Japanese, and in this survey as well, the traditional “low high falling pattern” was not observed for the accents of the 5th group of two-syllable nouns (i. e., “ame” <rain>, “saru” <monkey>), but the same “high low pattern” as the standard Japanese. However, for some nouns in the third group such as “tera” <temple> or “hana” <flower>, the HH pattern, which is the traditional accent of Kagawa, was also observed.

Additionally, some respondents answered that they use some traditional words and phrases such as “Nan shon?”<How are you?> and “kosobai” <ticklish> in their everyday life. In this survey, it was found that the birthplace of one’s parents and whether one was raised in Kagawa prefecture had an influence on the retention of traditional dialect vocabulary and accents, rather than the awareness that one “likes dialects” or “often uses dialects.”

